

「寛解の連続」事前解説

2022-8-30作成

鯨エマ（加筆：水野ゆふ）

こんばんは、今日、「寛解の連続」で音声ガイドを担当いたします、水野ゆふです。

この映画は、神戸で活動するラッパー、こばやしかつゆき、通称カツツンを追いかけたドキュメンタリー映画です。ご覧いただく前に、構成、シーン、登場する人物について、少しお話ししますので参考になさってください。解説は全体で3分程度です。

まず構成です。

撮影期間は主に2015年から16年。躁鬱病を抱えながらの創作活動、通院、宗教活動、ヘルパーの仕事、家族関係などを描いています。

全編を通して、監督がカツツンにインタビューする形で進みます。

主な場所は、神戸市内のイカワダニチョウです。カツツンの運転する車の中、カツツンの部屋、2つのライブハウス、精神病院の喫煙所、ヘルパーとして働く現場です。生活拠点である神戸の明石大橋が度々映し出されます。冒頭のライブの映像だけは2011年に撮影されたものです。少し音割れしていますがもともとの映像の乱れです。精神病院のシーンは全て2015年2月14日で、通院風景から診察後まで同じ日です。

次に登場人物をご紹介します。

まず、カツツン、ことコバヤシカツユキ。

中肉中背で、丸顔、細い目。顎にうっすらとひげを伸ばしていますが、撮影シーンがランダムに並んでいるので、シーンによっては剃られていることもあります。髪型も、坊主頭のときもあれば、伸ばして後ろに流していたり、サイドだけ刈り上げて後は後ろで束ねたり、白いタオルでまとめ上げたり、実によく変わります。

服装はいつもモノトーン。少しダブつきのあるラフな格好です。よくタバコを吸います、自分の部屋はもちろん、病院の喫煙室、車の中、スタジオのキッチンなどで、よく吸っています。

部屋は雑然と散らかり、ベッド、テレビゲーム、低いテーブルがあり、ラップのリリック（歌詞）を考えるときは、床に座ってテーブルに向かい、ベッドに寄りかかるようにして作っています。創価学会に入信しているため、小さな仏壇が、観音扉を閉めた状態で筆筒の上に置かれています。

次にカツツンを取り巻く人々です。

まず、監督。ミツナガジュン。長髪を後ろで無造作に束ね、黒縁のメガネをかけています。カメラを持っているので、声しか聞こえませんが、2度ほど姿を見せます。インタビューでカツツンに話しかけて

いるのはミツナガ監督です。

カナ。実際には登場しませんが、カツツンの歌の中、話の中に度々登場する、大切な思い出のあるカツツンの元彼女です。

イチ(市)。レコーディングエンジニアで、カツツンの歌を録音したり、ライブでキーボードを叩いています。少し癖のある髪を肩まで伸ばしています。

北岡。バイク屋さんです。作業服に野球帽を後ろ前にかぶっています。カツツンが先輩と呼んでいます。

マイメン。これは通称で、実際にマイメンと呼ばれることはないのですが、精神病院の喫煙室で居合わせる患者さんです。髪は元々角刈りなのですが、かなり伸びて少し寝癖がついています。前歯が数本抜け、スウェットの上着に迷彩柄のズボンをはいています。

それから、ヘルパー派遣先の利用者3人とその家族が登場します。

ケンゴ。ベッドに寝たきりの重度障害のある青年です。移動は、カツツンがお姫様抱っこで行います。同居する母親は、比較的若く見え、テキパキとケンゴの世話をしています。

ユウマ。自分で動けるけれど付き添いが必要なくらいの知的障害者です。カツツンよりも大柄です。髪は短く、いつもニコニコしています。お母さんと、マルチーズも少しだけ登場します。

タカシ。身体と知的の重複障害があり、入浴も着替えも全て介助者が行います。少し幼い顔つきですが、自宅のシーンで登場するお父さんが初老の雰囲気なので、タカシは成人していると思われます。

カツツンの両親。

父親は1回だけ登場しますが、声のみ聞こえます。

母親はボブカットで、インタビューを受ける和室の背景には、仏壇があります。

最後に言葉と動きの説明をいくつか。

ヒャクハチバーズは、小林勝行の曲のタイトルです。数字で108、バーズは英語で書きます。

サイファーとは、ラップやヒップホップなどで大勢で円になって歌い合うことです。

イカチュウは、イカワダ二町の中学校の略です。

それから、カツツンはヘルパーの仕事の前にコルセットをまくことがあるのですが、これは障がい者を持ち上げて移動させるとき、腰痛防止のために巻くものです。

以上で事前解説を終わります。

それでは、どうぞ本編をお楽しみください。上映時間は112分です。